

要旨

I. 研究の目的

本研究の目的は、上級実践コースの在宅看護学実習の経験を通して、急性期病院に通院している患者に対する外来看護師の在宅療養支援のあり方について考察すること。

II. 研究方法

本研究は、筆者が上級看護実践において関わった1事例と、外来看護師の在宅療養支援を促進することを目的としたプログラム中心管理コンサルテーションのプロセスを分析し、事例研究としてまとめた。

III. 結果

事例では、便秘と下痢により緊急受診を繰り返す高齢者が、在宅療養支援の対象者とは認識されず、腹部症状が不安定であった。訪問看護などを導入したところ、服薬管理など病院での評価とは異なる生活の実態があった。

外来看護師による在宅療養支援を推進するため、コンサルテーションを実施した。業務量が多い、支援方法が分からないといった理由により取り組めていないことが分かった。在宅療養支援の対象者を継続的に支援するためのフロー図の作成や、勉強会などを実施した結果、看護師の在宅療養支援に対してのモチベーションが向上した。

IV. 結論

1. 症状マネジメントが難しく、緊急受診を繰り返すケースには、早期から在宅療養支援を開始する必要がある
2. 外来看護師が考える在宅療養支援の対象者像は、全12カテゴリーであった。これらのカテゴリーは、介護保険サービスの利用や、医療的ケアが必要ものだけでなく、「家族関係に課題がある」、「不安が増強している」、「病院まで移動する手段を確保できない」、「医療・介護のために使用できる資金が確保出来ない」といった幅広い患者背景を捉えている事が分かった。
3. A病院の外来看護師は、在宅療養支援の対象者についての認識はあるが、行動に移せていない段階だったと分かった。「知識がなく、実践するのを躊躇している外来看護師」もいたため、今後は介入方法について具体的に提示していく必要があると考えた。